

BOOK Review

組織で生きる 管理と倫理のはざままで



評者 浅井 文和 医学文筆家/前・朝日新聞編集委員

広告代理店大手、電通で起きた新入社員の過労自殺が昨年、大きな社会問題になった。会社と上司は労働基準法違反の疑いで書類送検され、社長は引責辞任した。この会社の中には、異常な長時間労働を「なんか変だ」と感じていた社員はいたことだろう。それでも、「やっぱり変だ」と問題提起して組織を変えようとした社員はいなかったのだろうか。

本書は、組織の倫理に関する研究書であり手引き書だ。組織で起きる倫理的ジレンマについて、具体的な事例を基に検討し、倫理的な意思決定をするためのプロセスを論じている。著者は大学教員を経て、聖隷浜松病院で副院長兼総看護部長を務めてきた。昨年退職され、長年温めてきた研究成果をまとめて本書が完成した。

検討されている事例は、例えば、看護部長が外科手術での医療事故が隠蔽されている事実を知ったときにどうするか。事例にかかわる医師、看護師ら多くのメンバーの倫理的課題を分解し、整理し、構造を明らかにしていく。読者は提示された問いに答えていくうちに、倫理的な意思決定が身についていくという仕組みだ。

このような具体例は看護の現場で起きたことなのだが、倫理的ジレンマは看護の世界だけで起きているわけではない。会社や官公庁、学校、病院など、あらゆる組織が倫理的ジレンマを抱えて苦しんでいる。

現実には、倫理的問題の当事者であってもなかなか直視して取り組めない、どうしていいかわからない、倫理

的リーダーシップを発揮できない、意思決定をするのが難しい。「個人的には長時間労働は健康に良くないと思うけど、管理職としては無理をしてでも仕事を期限内に完成させなければならない」などと、異なった役割の間で葛藤する。

本書で展開される倫理的検討のプロセスは、長く会社組織の中にいた私の目には非常に貴重なものに見える。このような組織倫理の問題を系統立てて論議する機会が日本の会社組織では得難いからだ。組織の倫理的問題をどう捉えたらいいのか、学ぶ機会もほとんどない。経営倫理学について本書が「米国のビジネススクールでは当たり前のように教授されている科目であるが、残念ながら、日本ではいまだに一般的とはいえない」(p.220)と指摘している通りだと思う。

そういう意味で、本書の読者を病院の看護部長、看護師長だけに限るのはもったいない。ビジネス書として、会社の管理職が読んでも、目の前に直面した複雑に入り組んだ倫理的ジレンマをどう考え、どう意思決定したらよいかのヒントがある。管理者の役割とは何かを見つめ直すことができる。

倫理的な意思決定のプロセスは、すっきり爽やかに割り切れるものではない。道徳的苦悩に満ちている。時として苦悩の大きさに圧倒されそうになる。だからこそ、道しるべになる本書の価値はかけがえのないものに思える。

勝原 裕美子 著

四六判/328頁/2016年/定価(本体2,700円+税)/ISBN978-4-260-03013-7/医学書院 刊